VOLUNTEERS AND CULTURE

—文化特性の客観的観察眼のかん養—

JICA
000
24
JV
LIBRARY

日本青年海外協力隊
訓　練　所

1971年

国際協力事業団
受入月日 '84. 5. 25
登録No. 107914
000
14
JVK

ま　え　が　き

異った文化を正しく理解することは、今後外国で働く協力隊員の諸君にとって、重要な課題である。だから訓練所では、隊員諸君が異文化への理解、それを正しく判断できる人間になるように指導して来た。

十分とは云い難い点も多いが、今回この小書をまとめることにしたのも、これによってさらに諸君が異文化への理解を深めることを期待したためである。今後は隊員諸君の協力を得て、更に内容の深いものにしていきたいと思っている。

なお、これをまとめるに際し、訓練所常任講師ケネス・スキナー氏の努力に負うところが大であった。

JICA LIBRARY
1024070[3]

昭和46年8月15日

訓練所長
高　橋　成　雄

第　一　部

諸君はやがて日本青年海外協力隊の隊員として海外へ出かけることになっている。いうまでもなく、隊員はツーリストではない。諸君はツーリストのように行き先きの国の文化や社会を一方的に観察するわけにはゆかない。隊員の場合は、ひとりひとりが任国の社会と文化のなかに自分自身の場をうちたてなければならない。そういう場は自動的に変えられるものではなく、諸君自らがみつけ、築かなければならないのである。諸君の仕事がうまくゆくかどうか、また2年間の滞在を楽しく充実したものにすることができるかどうかは、多分に任国の文化や社会のなかに自分の場をうまく見つけることができるかどうかにかかっているといえる。

他国の国民は日本人ではない。これはわかりきったことである。外国の人々は日本人と同じ服装を見につけていない―これは見ただけでわかることである。しかし、もっと大切な―そして理解がもっとむつかしい―のは、外国の人々は日本人のような考え方をするとは限らないという点である。外国人は、生活のし方も、物ごとのやり方も日本人とはちがっているだろうし、ちがった信仰をもっているだろう。要するに外国人は日本人ではないのである。だからといって、諸君は任国の人々を奇妙な連中だと考えてはならない。ものごとのやり方が異なっているということで、奇妙な人間だということにはならない。任国での諸君はいわば「客人」である。客人としての諸君に望まれる事は「主人」である任国の人々を理解しようと努力することである。その国の人々の文化のなかで有効に仕事をすることができるよう、諸君自身が適当に変わることが大切であろう。「郷に入れば郷に従え」というわが国のことわざは、まさにそのことを教えているといえる。

人は誰でも二つの環境のなかで生きている。一つは「物理的」環境であり、

もう一つは「文化的」環境である。日本人は日本の物理的環境のなかで生きている。物理的環境を形づくっているものは、目で見、手で触ることのできるものである。例えばタタミ、しょうじ、すし、さしみ、箱根、富士山、"ピンキーとキラーズ"はそういうものである。ふつうの日本人はこのような物理的環境のなかで育ってきており、そのなかでは居心地よく感じる。

人の生活をとりまくもう一つの環境は文化的なものである。ここで「文化」というのは何も学問や芸術のことではない。文化とは社会を形づくる人々の習慣・慣行や、人々がもつ中心的信条、ことがらの良し悪しの評価のし方、住民に共通な心理、および自然や時間に対する把え方などを意味している。すべての国はその国に個有な物理的環境をもっているように、個有の文化的環境をもっている。人間は生まれたときから大人になるまでの間に、両親や友人や社会から、その社会の習慣、ものの考え方、世界というものの把え方などを身につける。だから、一般に一つの社会の人々は似たような物の考えをし、似たような世界観をもつ傾向がある。このような現象は、日本のように民族的にも言語的にも単一な社会の場合、格別つよい。だから諸君にとって、日本的なものの考え方、やり方、世界観や価値観などは、しごく当り前のものとして体得されている。日本に居る限り、そういう日本個有の文化は当り前すぎて、それが日本的なものだということの意識すらもつことはないだろう。わざわざとりあげて論ずるのが不思議に思われても当然である。日本人だけではない。世界中ほとんどの人は、自分たちの世界観や価値感がどこでも通用する唯一のものであると信じがちである。ところが現実はそうではない。世界には多くの国、民族、言語が存在するように、世界観や価値感についても多くのちがいがあるのである。

諸君はまもなく海外へ出てゆく。海外へ出るという物理的な事実によって、

諸君は日本の物理的環境から離れる。富士山を携行するわけにはいかない。2年間分のすしももってはゆけない。いたるところで同じ日本語を話していた周囲の人々もいなくなる。諸君の物理的環境は任国へ着いた瞬間、突然、劇的に変る。例えば任国がフィリピンなら、物理的環境はマヨン山、ジープニー、パパヤ、熱帯的しゅう雨、蚊とり線香、やしの実になろう。日本の物理的環境を携行できないこと ―― また新しい物理的環境に適応しなければならないこと ―― は容易に理解できよう。諸君はそのことを承知しており、現地の物理的環境がどんなものであっても、それに適応しようという心がまえをもっているにちがいない。

諸君が羽田を発つとき物理的な日本を携行することはできないという事実を受けいれるなら、同様に文化的日本をもって渡航することが望ましいかどうかを考えてみるべきであろう。日本の生活習慣、日本人の間の人間関係、祖先からひきついできた世界観や価値観をもってゆくべきなのか。日本のそれとは異なる文化的環境のなかへ、そういうものをどの程度もち込むのがよいのか。これらの問は諸君だけが答えることのできるものである。しかもこういう設問は、おそらく諸君の2年間の任期中、幾度も自分にたずねてみる必要があろう。

外国で仕事をするとき、日本にいるつもりで仕事をすることがよいのか、それともその国のやり方に自分が適合させる方がよいか、現地人と友人になるのに、日本人の友人をもとめるのと同じ気持ややり方がよいか。現地の人々を評価するさい、日本の評価の規準でやるのか、それとも現地の社会の価値感で理解しようとするのか。何か問題にぶつかったとき、日本でそれが起ったときと同じやり方で処理するのか、あるいは他国に住んでいるという事実を認識して解決しようとするのか。日本に居るようなつもりで行動し、思

考することと、フィリピン人や、インド人や、マレーシヤ人や、ケニヤ人や、ネパール人や、ラオス人のように思考し、行動することとの間にはそれぞれちがいがある。その間にどのようなつり合いを求めるかは、諸君がひとりひとり決めることである。

文化の相違を認識するということは、口でいうほど簡単なことではない。ただ、異った文化をもつ人々も、日本人である諸君と同じ意図で、また同じやり方でものごとに当っていると仮定するのは甘すぎるし、同時に正しくない。しかも、文化的相違を認識することは ― それ自体大切なことであり、むずかしいことであるが ― 協力隊員の場合最大の目的ではない。隊員としての諸君にとってもっと大切なことは、異なった価値観、世界観、信条、念願などを反映した「社会」のなかで協力活動をするということである。自分が育ってきた文化とは異なった文化のなかで、有益に働く能力は、異文化の経験のなかで高める他はない。いいかえれば、それは他人から教わることのできない能力 ― つまり自ら体得しなければならない能力なのである。人によってはこういう能力を楽に身につけるものもいる。ところが、なかにはそれが下手で、自分の心理的小世界に閉じこもり、現地の文化を知り、そのなかで働こうという努力をしたがらない人もいる。さらには、自分の母国の文化が現地の文化より優れていると感じ、現地で働きながらそういう感じを表明する人もいる。異文化のなかに入って上手に働く能力を身につけるには、他人への思いやり、開かれた心、それに知性が必要のようである。これらの資質はきわめて個人的、内面的なものであって、他人が教えることのできないものである。

第　二　部

協力隊の隊員は多くの異なった国へ出かける。さらに同じ国のなかでも、いろいろな土地で働く。協力隊員は、だからそれぞれいろいろの文化を経験する。したがって、諸君がぶつかるような文化的環境のすべてをここに述べることは不可能に近い。特定の国 ― またはその国のなかの特定の地方 ― の文化的環境を学び、理解するのは、だから訓練期間中、および派遣期間中、ひとりひとりの隊員にまかすほかはない。

ただ、そういう勉強の手がかりとして、このテキストの付表に、客観的にみて日本の文化的特徴 ― ないし現象 ― と思われるものをリストアップしてみた。それにはわけがある。他の国の文化的環境を正しく理解するためには、その前に ― あるいは同時に ― 自国の文化的環境の理解をすることが望ましいと考えるからである。もし諸君が他国の文化的特徴を客観的に見ることができるなら、日本の特徴をも客観的に見ることができるはずである。日本の文化的特徴を客観的に理解しようとすること自体、わが国の文化が世界共通のものではないということを示しているのである。日本の文化的環境も ― 他のすべての国の文化的環境と同じく ― 多くの、しかも相互につながりのある文化的特徴や現象として客観的にとりだすことができる。付表はそういう特徴や現象のリストである。

リストは客観的にまとめてあるつもりである。つまり、そういう特徴の良し悪しを批判することは関係がない。同様に、他国の文化的特徴を理解しようとする場合にも、諸君はそれらを批判すべきではない。隊員にとって大切なことは、任国の文化を理解し、そのなかで有益な仕事をするということである。任国の文化的特徴が日本のそれと異なっているということは、それがまちがっているということでもなければ、奇怪なことでもない。諸君が任国

の文化を批判的に見るならば、現地の人々もそういう目で日本の文化的特徴 ― それは現地では隊員が示すことになる ― を奇怪であり、まちがっていると思うのを許すことに通じるのである。そうなっては相互に理解しあうところではない。何もかもうまくゆかなくなるだろう。

付表のリストは左半分によせてあり、右半分には何も書き入れてない。右側はその標題に示されているように、左側にならべた日本の文化的特徴に対応するものは何かを書き入れるようにしてある。諸君の任国の特徴はどうかという意味である。期待したいのは、諸君が各自の任国や任地の文化的特徴に関心をもって、それぞれの項目の右側に自分で記入するようにしてもらいたいということである。日本の特徴と共通しているか。似ているか。ちがっているか。あるいは全く相反するか。ちがっている場合、何故ちがうのか。そのようなちがいが社会全体にどう反映しているか。こういう研究や努力を期待したい。

諸君はふつう右欄へ書き入れるようなことについての情報を訓練中に得るはずである。「現地事情」や「現地における人間関係」などの学習の機会に、帰国隊員や専門の講師から答をひきだすことができよう。ただ、訓練中にきいた任国の文化的特徴は、あくまで他人から得たものであり、いわば仮りのものでしかない。帰国隊員と話あう場合でも忘れてならないのは、その隊員は要するに特定の経験 ― 配属先の機関の人々や、その地方の住民とのつきあい ― を語っているにすぎないということである。同じ任国でも地域によっては宗教さえ異なっていることがある。だからその地域の文化的環境もその地域のものであって、任国全部にはあてはまらないという場合もあり得るのである。付表の右欄にかき入れるための本当の「答」は、諸君のひとりひとりが現地へいって、自らその土地の文化を経験してから、はじめてでてく

るだろう。

最後に、予め承知しておいてもらいたいことがもう一つある。それは諸君の任国のほとんどは、二重の文化的構造をもっているということである。一つはその国の ── あるいは地方の ── 伝統的な個有文化である。一般的にいって、余り教育をうけない民衆の文化である。もう一つの文化は、高等の教育（しばしばアメリカやヨーロッパでの）をうけ、西欧的教養を身につけたエリートたちの文化である。後者は、大ていの場合日本人の隊員よりもはるかに国際的習慣を重んずる。当然のことながら、このようなエリートはその国の人口のうちではごく少数を代表しているにすぎない。しかし、諸君のうちには、仕事によってこの種の現地人と接するものもいよう。この種の西欧的文化は、その国の伝統的文化とは別になっており、両者は融合していない場合がほとんどである。そういうところでは、隊員は同じ国の同じ場所で、二つの異なった文化 ── のなかで生活し、仕事をすることになる。

協力隊員は、宿命的に異なった文化的環境のなかに入りこみ、そこで協力活動をしなければならない。東京で訓練をうけている間は、そのことは話として理解するにとどまる。日本にいる限り、体験的に理解できるものではない。

日本文化の特徴

1. 日本では食事をするのに箸を使う。

2. 日本では食事の時両手を使う。（片手に箸、片手に碗）

3. 日本ではむかしから料理は一品ごと別々の皿に盛られる。

4. 日本では道を歩きながらものを食べることは育ちの悪さを表すものと考えられる。

5. 日本では家に入る時、はきものを脱ぐ。

6. 日本では風呂に入るのは、たいてい、夕方である。

7. 日本では日程や計画を厳格に守ることが要求される。

8. 日本人はだいたいにおいて、時間を厳守する。

9. 日本では時間は進行するものであるという観念がある。つまり時間は一直線上を順を追って経過して行くものとして捉える。今日は昨日の、今年は去年の続きである。時間は静的でなく、一定の法則や

任国（国又は地域）の文化的特徴
（自分で観察して記入して下さい）

単位で流れて行くものである。

10. 日本では婦人は笑う時に口に手を当てることが多い。大きな口を開いて笑うのはたしなみがないとされている。

11. 日本では男性が優位を占めるという考え方が一般的に受入れられている。女性が権力を持った地位につくことはあまりない。婦人の役割、特に妻としての役割はかなりはっきり規定されている。

12. 日本では一度に一人の妻しかめとれない。

13. 日本では結婚は仲人か親によってお膳立されることが多い。

14. 日本では長男とその家族は両親と生活をともにするたてまえになっている。（最近ではこの習慣は必ずしも実行されない場合があるが。）

15. 日本では夫婦または男女が公衆の面前でくちづけをしたり、または体で愛情の表現をしたりすることはめったにない。長い別離のあ

とでの再会の際でも強く抱き合って懐しさを表すことはしない。

16. 日本では宴会やパーティーには夫だけが行き、妻をそういう場所に同伴することは、めったにない。

17. 日本では自宅に客を招待してもてなす際、妻が会話に加わることはまれである。

18. 日本では子供を育てる責任は、まず母親にあるとされている。

19. 日本では子供の成育に果たす母親の役割が長い間続き、時には20才前後まで及ぶ。そのため、子供は母親の意見に敏感になり、母親の愛情をつなぎ留めようと気を配る。

20. 日本では自分の考えを強く主張することは、失礼と見られる場合がある。特に年長者に対しては。

21. 日本では面と向って人を批判することはあまりない。むしろそれを避けようと努める。

22. 日本では拾物をした場合、落主に返そうとしてできるだけの努力

をする。

23. 日本では物を借りた場合、それを持主に返すことは当然の義務で、しかもできるだけ無疵のままで返すべきだと考える。

24. 日本では約束したことを守るのは当然のことと考える。

25. 日本では契約書を交わすという慣習は、それ程強くない。

26. 日本では年長者は一般的に優遇される。グループ活動の場合、そのグループの中の年長者が、推されて指導的地位を与えられることが多い。

27. 日本ではどの団体や職場の中でも、メンバーを経験年数に基づいて、「先輩」「後輩」と色分けすることが多い。

28. 日本人はグループで活動することが好きで、場合によっては、所属団体の利害の方が、メンバー個人の利害よりも大切にされることがある。行事は個人活動よりもグループ活動を主体に計画されること

とが多い。自分が所属する団体に対して忠誠を示すことは賞讃の的になる。

29. 日本では物事を決めるのに全員一致という方法をとることが多い。したがって論議を尽くして相手を説得し、最後は表決をとって多数意見を採用するのではなく、異る立場の者が同時に受入れられる案を模索するために議論が進められるのが一般的である。

30. 日本では自己紹介、または他人を紹介する際に、その人の所属する団体の名前をも伴せて紹介することが多い。

31. 日本では姓を以って呼ぶことが多く、名を用いて他人を識別することはしない。

32. 日本ではもし甲と乙が話し合っている中に甲の知人の丙が訪ねてきて話しをはじめるような場合、甲が丙を乙に紹介することはあまりない。

33. 日本では公衆の面前であっても、

公道で小用を足すことがよくある。

35. 日本では酒を注いでもらう時、自分の盃を持ち上げてそれを受けるのがふつうである。

36. 日本では宴会やパーティで歌をうたうのを好む。グループで唄うこともあり、個人で唄うこともある。

37. 日本人のユーモアには酒落が多い。

38. 日本では男性同志の友情を体を触れあうことで表現することは稀である。多少でも酒気を帯びている時は、腕を組んだり肩を抱き合ったりすることがあるが、しらふの時、手をつないで歩くのは奇異に映る。

39. 日本では深酒をすることが多く、その結果酔払うというのはよく見られることである。また酒の量で男性らしさやたくましさを表す風潮がある。

40. 日本では泥酔した者が、電車の中や駅のプラットホームまたは街

路で、嘔吐するのを度々見かける。また酔払いが大声をはりあげて歌を唄うのをよく見かける。

41. 日本人は自分が何であるかを考える場合に、日本国民であるという意識がかなり前面に出てくる。

42. 日本では日本人以外の者を「外人」と呼ぶ。

43. 日本人は目標指向型の国民である。つまり何事をするにもまず達成目標を設けて、それを達成するために努力を集中する。

44. 日本では世界は物理的原理に支配されていると考える。つまりすべては物理的要素で構成されており、機械的法則に則って機能していると見る。諸々の物理的現象には超自然的力が介在して達成されていると信ずる人は少なく、人間の努力をより信奉する。

45. 日本では多くの人が生活上の利便とか、肉体的快楽の追求といった物質的世界に関心を示す。審美的価値が尊ばれる反面、既存の宗

教によって説かれる精神的価値は概して重要とは考えない。物質的欲求が個人の人生の針路を決めるのに大きな役割を果たす。

46. 日本では欲求を満たし、目標を達成するために必要であれば、自然を手直しするのは当然であると考え、単に自然界の秩序に順応することは好まない。

47. 日本人は困難に陥ったり退屈したりする場面では静かにそれに堪えようと努め、それに逆ったり退席したりはあまりしない。そのような場面に留まりながら、そういう状況を変えようと努めるか、またはそれを受入れて堪えようとする。

48. 日本の文化は本質的には"恥の文化"である。つまり他人に見られた場合に恥をかかない様にという配慮で行動が決定される。

49. 日本では他人に恩義を受けた場合、その人に対しては義理を感ずる。

50. 日本では人は皆同じ人間として

扱われる。社会的に地位の高い人も低い人も人間であることには変わりがない。乞食に銭を与える場合でも相手が同じ人間であることには疑いをはさまない。決して人間以下の動物とは見ないであろう。

51. 日本では赤の他人に対する心遣いがうすい。知人に対しては責任感を示すが、赤の他人に対してはさほどの責任感を示さない。（電車の中で知人の足を踏んだ場合、はっきりと謝罪の意を表わすが、他人の場合「すみません」とも云わない場合がある。）

52. 日本では実生活の中に異なるいくつかの宗教を取入れるのはごく普通である。たとえば、地鎮祭を神道に則って行ない、結婚式は教会で挙げ、葬式は仏式でおこなうという例は珍しくない。

53. 日本人は自身を勤勉な国民だと思っており、勤勉であることは賞讃の的になる。

54. 日本人は給料のかなりの額を貯

蓄する。

55. 日本では、会社または政府機関で長く勤めた人が役に立たなくなっても、その人に解雇を云い渡す代りに新い閑職につけることが度々ある。日本では雇傭人を解雇するのはむずかしい。

56. 日本では他人の家を訪問する際手土産を持っていくのが一般的である。

57. 日本では他人に贈物をする場合、その品物の価値を低く云うとが多い。「ほんのつまらない物ですが」などと云って手渡すのが普通である。